

一八八三年九月二十六日(水)

南神村ドツキネーシヨルのカーリー寺院における聖ラーマクリシュナ

学者と聖者サイドクの違い——現代はナーラダの信仰がよい

今日は水曜日、バッドロ月の黒分十日、キリスト暦一八八三年九月二十六日。水曜なので信者の集まりは少ない。みんな仕事があるからである。信者たちは大抵、日曜か休日になるとタクールにお会いするためにここに来る。校長は午後一時半に仕事を終えて、三時には南神村ドツキネーシヨルのカーリー寺院内のタクルモトの許に到着した。この頃、ラカールとラトウはほとんどここに泊まりきりである。今日は二時間ほど前からキシヨリーが来ていた。部屋のなかでタクールは、小寝台に坐っまっていらつしやる。校長は入ると床に額かぶずいてタクールを拜し、ごあいさつ申し上げた。タクールは様子を聞かれたあと、話はナレンドラのことに移った。

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かつて) えーと、ナレンドラに会ったかい? ハッハッハッ、ナレンドラはわたしのことを、こんなふうに言ってるそうだ——『あの人はまだ、カーリー殿なぞに参拜に行っている。正しい理解を得たら、二度とカーリー殿には行かれなくなるだろう』と。」

ここにしげしげ通ってくることを、家の人は大そう迷惑に思っているんだよ。先だって来たとき馬車で来た。スレンドラが馬車賃を払った。そしたら、ナレンドラの叔母さんがスレンドラの家に行つて、さんざ文句をつけたそうだ」

タクールはナレンドラの話をなさりながら立ち上がられ、話をつづけながら北東のペランダに行つてお立ちになった。そこにはハズラー、キシヨリー、ラカールたちがいる。午後のひととき――。

聖ラーマクリシュナ「えーと、お前、今日よく来られたね。学校はないのかい？」

校長「今日は一時半で終わりました」

聖ラーマクリシュナ「どうしてまた、そんな早くに？」

校長「ヴィディヤサーガルが学校に来られましたので――。ヴィディヤサーガルは学校の持ち主なので、あの方が来られますと生徒たちを喜ばすために授業は半ドンになるのでございます」

〔ヴィディヤサーガルと真実の言葉――タクール自ら語られる甘露の言葉〕

聖ラーマクリシュナ「ヴィディヤサーガルは、どうしてほんこのことを言わないのだろうか？」

〃真実を語り、全ての女を母とみなす。これにて神（ハリ）に会わざれば、トゥルシーは嘘つきなり〃（訳註、トゥルシー――ラーマの熱烈な信者トゥルシーダースのこと。これは彼の言葉）

誠実を守っていれば至聖（カミ）がつかめる。ヴィディヤサーガルは前に此処に来ると言ったのに、まだ来ないじゃないか。

学者と聖者サイドクはえらい違いだ。ただの学者は女と金に執着がある。聖者サイドクの心はハリの蓮華の御足みにある。学者は、言うこととすることが別々だ。聖者とはぜんぜん違う。ハリの蓮華の御足みに心をおいている人たちのする仕事、言うことは、ほかの人とは全く違うんだよ。カーシー(ベナレス或いはバナラシ)で、ナーナク派(シーク教)の若い修行者に会った。お前と同じ年位だったが、わたしのことを愛に満ちた聖者さまグと呼んでいたっけ。カーシーにはナーナク派の僧院があつて、ある日のこと、そこへわたしを連れていってくれた。僧院長に会ったが、何だか家庭の母さんみたいな感じの人だったよ。その人に、『修行の方法ウバエは?』と尋ねてみた。その人は、『末世カリユガでは、ナーラタ式の信仰です』と言った。本を読んでしたが、終わるとこう唱えた——『ヴィシユヌは水に、ヴィシユヌは地に、ヴィシユヌは山に在おほす。世界いたるところにヴィシユヌは遍在ます』そしてさいごに、『シャーンティ、シャーンティ、ブラ・シャーンティ(平安あれ、平安あれ、全き平安あれ)』と」

〔現代はヴェエーダの通りにはいかない——智慧の道〕

「別の日にはギターを読んでいた。固く戒律を守っていて、聖典を読むときは俗人の方には目を見向けない! わたしの方は見ていた。いっしょにシエジヨさん(タクルルのお伴をしてついていた富豪マトゥール氏)がいたら、シエジヨさんの方に背を向けてしまった。そのナーナク派(サイドク)の聖者が言っていたんだよ——『方法ウバエは、ナーラタのような信仰グだ』と」

校長「その修行者の方々は、ヴェエーダーンタの信奉者ではないのですか?」

聖ラーマクリシユナ「そうとも、あの人たちはヴェーダーンタの信奉者だが、信仰の道もちゃんと心得ている。知つての通り、今の世の中ではヴェーダにある通りにはできない。ある人がガーヤトリの特別修行（プラスチックアラナ）をするというから、わたしは言つてやったよ。『どうして？ 現在は Tantra（密教）式がいいのだ。Tantra 流にその修行をしたらどうだ？』と。

ヴェーダにある通りの行事は、とても、とても、今では難しい。それに、今の人は奴隷のような生活をしている。十二年も他人に使われていると奴隷になつてしまふ。長年使われていた連中の色に染まつてしまふ！ 連中のラジャス性やタマス性、平気で生き物を殺したり贅沢をしたり、そういうことがみんな身に付いてしまふ——そういう連中に仕えているうちにね。ただの奴隷ならまだしも、年金までありがたがつてもらうんだから。

一人のヴェーダーンタ派の修行者がこの寺に来ていた。雲を見ると踊り出してね、嵐にでもなれば、それこそ大よるこびだった。瞑想のとき、誰かがそばに来ると怒るんだ。いつかわたしがそばへ行つたら、イラついていたよ。年中、ブラフマンのみ真実、世界は虚偽こげと考へつづけているんだ。『現象のせいである色々な色や形が見えるのだ』と言つて、いつもプリズムを持つて歩いてた。プリズムを通して見るから色々な色が見える。本体には何の色もないのに——。それと同じに、実在するのはブラフマンだけで外には何もないんだが、マールヤで、つまり我執で、いろんなものを見ているのだ。マールヤが起ここらぬように、執着が起ここらぬようにと、どんなものでも一度しか見ようとしなない。沐浴するときも空とぶ鳥を見て、ブラフマンのみ実在、世界は虚偽こげと分別ツチヤールしていた。二人で連れだつ

て用を足しに行つた。イスラム教徒の使う池だと聞いたら、その水は決して使わなかつたよ。

ハラダリがその修行者に文法のことを質問していた。文法をよく知っていたんだね。子音や母音の話をしていたよ。三日ほどこの寺にいた。ガンガー沿いの堤防の近くで縦笛シヤウイの音を聞いて、『ブラフマンを覚さとつた人は、こういう音をきくと三昧に入るものだ』なんて言っていた」

ドフキネーシヨル
南神村でグル、聖ラーマクリシユナ——パラマハンサの境地を披露

タクール、聖ラーマクリシユナは修行者たちの話をなさっているあいだ中、大覚者パラマハンサの境地というものを余あますところなく表されていった。あの子供のような歩きぶり！ お顔は時おり輝くように笑みがこぼれる！ 腰には下衣カボルもなく——つまり真つ裸で——。嬉しくて楽しくてたまらないというような目元！ タクールは小寝台にまたお坐りになって、魂を惹きつけるような話をお続けになるのだった。

聖ラーマクリシユナ、モニ校長に向かつて——

「ナングタ(トーター・プリー)にヴェーダーンタの話を教わつた。ブラフマンのみ実在、世界は虚仮、魔術師が来て手品をしている。何にも無いところからマンゴーの木をバツと出す。おまけにマンゴーの実までなっている。これもみんな手品だ。魔術師だけがほんとうに在ある」

モニ「人生は、一夜の長い眠りでございますね！ すべてを正しく見ていない、ということがわかってきました。大空のことを理解できない心で世界を見ているのですから、正しい見方はできないと思えますが？」(訳註、モニー—マヘンドラ・グプタが『不滅の言葉コムリ』の中で用いている仮名の一つ)

タクール「まだあるよ。大空のことを、わたしらは正しく見ていない。空が地平線で大地と接しているように見える。そんなふうで、どうして人間がものを正しく見ることができかね？ 心が熱病にかかっているんだから——」

タクールは美しい声で、熱病とそれを癒すダヌヴァンタリ（神話上の優秀な医者）についてお歌いになる——

この恐ろしき錯乱ごまかの病を おお、母なるシャンカリーよ

恵みの御足もて 蹴散らし給え！

（一八八三年四月八日に全訳あり）

「病気でなくて何だ？ 見ろ、世間の連中のケンカ沙汰を——。何であんなに年がら年中争っているのかねえ。誰がナニした、お前がこうした。大きな声で叫んで罵りあつて！」

モニ「私、キシヨリーに申しましたのですが、空カラの箱には何も入っていない。それなのに二人が、両側から引つ張り合っている——金かねでも入っていると思つて！」

〔肉体ゆえの困難——肉体は必要か不必要か？ この世は愉快な遊び小屋〕

タクールとモニ校長はカーリー殿の方に歩いて行く。

モニ「まったく、この肉体が苦くるしみの因もとなのです。それがよくわかっているので、智者は、考える

わけでございますね、殻カラを脱ぎ捨てたらどんなに楽かと」

タクール「どうして？ この世は幻の幕でもあるが、愉快な遊び小屋でもあるんだよ。肉体があった方がいいじゃないか。世の中を楽しい運動場にすればいいんだ」

モニ「でも、終わりのない喜びがどこにございませうか？」

タクール「ふん、それもそうだが——」

タクールはカーリー堂の正面に來られて、大実母マに額ぬかずいて拜ひまれた。モニもそれにならつた。タクールは正面の低いテラスに大実母マカーリーと向きあつてお坐りになつた。赤い縁取りの下衣カボルを召されて、その端が肩から背にかかつてゐる。西側ナトマンディルに舞堂の塔が見える。モニもタクールのすぐ横に坐つた。

モニ「もしそうであるなら、肉体などかかえてゐる必要はないと思つたのですが？ どう考えても、カルマの苦楽をくりかえすためにだけ存在する肉体なのですから——。何をしてゐるのか、ほんとは誰にもわからないのです。結局は死んでいくんですから——」

タクール「豆は、糞の上に落ちても豆の木になるよ」

モニ「それでも、八つの束縛があるでしょう？」

〔サツチダーナンダがグル——グルの恵みで解脱〕

タクール「八つの束縛じゃない、八つの足枷あしかせだ。それがあつて何だといふのかね。あの御方

のお恵みがあれば、一瞬のうちに八つの足枷(京世)なぞ外れてしまう。どんな具合かわかるかい？ 千年の間真つ暗闇だった部屋にランプを持って入れれば、その瞬間に闇は消え失せる。少しずつ、だんだんと消えるんじゃないだよ！ 手品師の特技(わざ)を見たことがあるかい？ 沢山の結び目のある紐(ひも)の片端(はし)を何かに縛りつけて、もう片端を自分の手に持って一、二度振ると、結び目は全部解けてしまう。だが、ほかの人がいくら必死になってやっても解くことはできない。ゲルの恵みで、結び目はみんなアツという間に解けてしまうんだよ」

〔ケーシャブ・センが変わった原因(わけ)は聖ラーマクリシユナ〕

「ところで、ケーシャブ・センがなぜあんなに人が変わったかわかるかい？ ここにずいぶん足繁(しげ)く通ってきたものだ。ここであいさつの仕方を教わったのさ。ある日のこと、わたしは言つてやった。『修行者に対して、こんな具合にあいさつするものではない』と。いつだったか、イシャンといっしょに馬車に乗ってカルカッタに行く途中でケーシャブ・センの変わった話が出たら、そこでハリシユがうまいことを言った。『小切手(チエツク)はすべて、こちらから振り出していただかねばなりません。そうしてから銀行(バンク)で現金に換えてもらうのです』と。ハツハツハツハ」

- (訳註) クラルナヴァ・タントラで説かれている足枷(あしか)は次の八つ——(1)恥(は)ずかしさ (2)憎(にく)しみ (3)恐(おそ)れ
 (4)階級(階級)の誇り (5)家柄(いへ)の誇り (6)品の良(あ)さの誇り (7)猜疑心 (8)隠(かく)し立て

モニは感じ入ってタクールの言葉を傾聴していた。グルという姿を通して、サッチダーナンダ(大実在)は小切手を振り出して下さるのだと覚った。

〔以前の事——ナングタ・ババの教え——神は不可知〕

タクール「あんまり考えるな。あの御方を知り尽くすことなんか、誰ができるというのかね？ ナングタがよく言った言葉をおぼえているが、この全宇宙は、あの御方のほんの一カケラなんだ。

ハズラーはほんとに分析が好きだよ。神のなかの、これこれの部分がこの世界で、コレコレの部分がまだあとに残っている、なんて計算しているんだよ。あれの計算を聞いていると、わたしは顔がズキズキしてくる。わたしは、自分が何も知らないということを知っているだけだ。ある時はあの御方をよく思い、またほかの時には悪く思ったりする。あの御方がわたしに分かる筈がないだろう？」

モニ「仰せの通りでございます。あの御方を理解することなど、誰にもできません。ほんのわずかの知識を振りかざして、自分は全部知りつくしたなどと考える人間がいるのです。あなた様がおっしゃる通り、ア리가一匹、砂糖の山の裾に行つて、一粒食べて満腹になつてこう考える——「こんどは山全体を運んでいこう！」と」

〔神は理解し得るか？ 方法は？——シヤラナーガタ(すべて委ねる)〕

タクール「誰だつて、あの御方を知ることではできない。わたしなどは、知ろうという努力さえしな

いよ！ わたしはただ、大実母ママと呼びつづけるだけだ！ 大実母ママがいいようにして下さる。あの御方が、その方がいいと思つたら知らせていただく。思おぼし召めしがなければ知らないでいよう。わたしは猫の仔といっしょだよ。仔ネコはただ、ミヤーミヤー鳴くだけ。母猫がどこに置こうと——台所に置こうと、旦那のベッドの上に置こうと任せきつてゐる。小さい子も母親を求める。母親がどれだけ金持ちか、そんなこと知るものか！ 知ろうとさえ思わない。お母ちゃんがいるんだ、何も心配することないんだ」といふことだけ知つてゐる。女中の子も、自分には母ちゃんがいる」といふことだけ知つてゐる。旦那の子とケンカするとうう言う——『ボク、母ちゃんに言いつけてやる！ ボクには母ちゃんがついてゐるんだぞ！』わたしも、こんな子供と同じ気持ちだよ」

突然、タクール、聖ラーマクリシユナは、見ろ」とご自分の胸を手で指してモニにおつしやる。「ほら、此処ここに何かいる。どう思う？」

彼はおどろいて言葉もなくタクールを見つめていた。そして心中に思った。——タクールの胸の中に、大実母ママそのものが在あす！

大実母が肉体をまとして来られたのか？ 衆生を救うために？

タクール、聖ラーマクリシユナ、カーリー堂のテラスで信者と共に

聖ラーマクリシユナは南神村ドツキネーシヨルのカーリー堂のテラスにお坐りになつて、カーリー女神の神像の中に宇宙の大実母を見ておられる。校長たち信者そはが傍そばに坐つてゐる。聖ラーマクリシユナは祈りの言葉を

称えていらつしやる。「おお、大実母！ おお、マー！ オームのすがた！ マーよ！ 皆はいろいろ言うけれど、マー！ わたしは何もわからない！ 何も知らない！ 明け渡します、すべてを委ねます！(シヤラナーガタ、シヤラナーガタ) あなたの蓮華の足に淨い信仰を持つように、マー！ それから、あなたの世にもきれいな現象に捕まらないように、マー！ 明け渡します、すべてを委ねます！(シヤラナーガタ、シヤラナーガタ)」(訳註、シヤラナーガタ——全託、すべてを委ねる、自身を明け渡すという意味)

神殿の献灯がすんだころ、聖ラーマクリシュナは部屋の小寝台に坐つていらつしやる。マヘンドラは床に坐つている。(訳註、マヘンドラ——マヘンドラ・クプタが『不滅の言葉』の中で用いている仮名の一つ)

彼は以前、ケーシヤブ・センの指導するブラフマ協会に始終出入りしていたが、タクルルにお会いしてからというもの、プツツリと行かなくなつてしまつた。聖ラーマクリシュナは絶えず宇宙の大実母と対話しておられる。それを見て彼は全く感動し、また、タクルルの全宗教大調和の話を聞いた時、神を熱望されているご様子に、もうすっかり身も魂も惹きつけられてしまつたのである。

彼がタクルルの許へ通うようになつてから足かけ二年になる。タクルルにお会いして、恩寵を受けたのである。タクルルは彼をはじめ、他の多くの信者たちに向かつて、神は無相であると共に有相でもあり、信者たちのために形をとつて現れて下さるのだと説明して下さるのだつた。そして、神は無形であると主張する人々に対しては、その信念は持つていてよい。しかし、あの御方はあらゆる事が可能である。つまり、有形でもあり無形でもあり、そのほかどんなものにもお成りになるのだ、ということを知つておくようにと注意なさるのである。

〔聖ラーマクリシユナとマヘンドラ——有形の神と無形の神——義務の感じ——無明アウディヤの俗世間サンサーラ——は信者にとって死の苦しみと同じ〕

聖ラーマクリシユナ「お前はどっちだったかな——無形の神かい？」

マヘンドラ「はあ。でも、あなた様がおっしゃいますように、神はすべてが可能である——有形であることも可能である」と心得ております」

聖ラーマクリシユナ「結構。それから、あの御方は意識というかたちで、動くものも動かぬものも含めた全宇宙に拡がり満ちていらっしやる、ということも心得ておけ」

マヘンドラ「私はあの御方を、意識を司つかさどっている意識であると思っております」

聖ラーマクリシユナ「今のところはそう考えているがいい。やたらに自分の考えを変える必要はないさ。その意識がつまり、あの御方の意識だ、ということがだんだんわかってくるだろうから。意識というかたちが、他ならぬあの御方なんだ。」

ときに、お前は金や権力に魅力を感じるかね？」

マヘンドラ「いいえ。ですが、気遣づかいをなくすために——心配かみなく至聖かみのことを考えるために、その……」

聖ラーマクリシユナ「そりゃ、もつともだ」

マヘンドラ「欲張よこつてはいないつもりです」

聖ラーマクリシユナ「そうだともさ。そうでなけりや、誰がお前の子供たちの面倒を見てくれる？ お前が、『自分は行動者カルクターではない』などと言いだしたら、子供たちはどうなる？」

マヘンドラ「ク義務があるうちは智慧は得られない」と聞いておりますが——。義務は真夏の太陽のように人を疲れさせます！」

聖ラーマクリシユナ「まあ、今はそう考えている。後になって、自然とその義務の感じがなくなってくるだろう。そうなれば話は別だ」

しばらく沈黙がつづいた。

マヘンドラ「生半可なまはんかな智識をもって世間で暮らすなんて！ 意識がハッキリしたまま死ぬようなものです——コレラみたいに！」

聖ラーマクリシユナ「ラーマ！ ラーマ！」（おお、神さま！ というほどの意。縁起でもないことを打ち消すおまじない）

死ぬときに意識がはつきりしていると、非常に苦痛を感じる。コレラの場合がそうである。このことを知っているので、マヘンドラはそう言ったのである。半ば目覚めている身にとっては、無明アツミヤイのこの俗世間サンサーラは炎で焼かれる苦しみである。マヘンドラの意を汲くんでタクルは、クラーマ！ ラーマ！クと言つて声を上げられたのだろう。

マヘンドラ「たいいていの人はチフス患者のように全くの無智ですから、いっそ死の苦痛を感じません
が——」

聖ラーマクリシユナ「ご覧、金があってもどうにもならないよ！ ジャイゴパール・センはあんなに金持ちなのに、いつも不平ばかりこぼしている。息子どもが言うことを聞かないと言って——」

マヘンドラ「貧乏だけがこの世の不幸でしょうか？ 六つの敵もありますし、それに、病気、悩み……」（訳註、六つの敵——色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、愛着）

聖ラーマクリシユナ「それから、名声と評判、人に認めてもらいたい気持ち。

そうだ、わたしはどんな境地に見える？」

マヘンドラ「まさに、眠りから覚めた人のようでございます。いつも神と合一していらっしやいます」

聖ラーマクリシユナ「お前、わたしの夢を見ることがあるかい？」

マヘンドラ「はい、何度も何度も見ます」

聖ラーマクリシユナ「どんなふうにも？ 何か教えているふうだったかい？」

マヘンドラは黙っていた。

聖ラーマクリシユナ「わたしが何か教えているようなら、それは、あのサッチダーナンダなのだよ。

よく覚えておおき」

マヘンドラはそれから、自分の見た夢についていろいろ説明してお聞かせした。聖ラーマクリシユナは注意深く全部聞いておられた。

聖ラーマクリシユナ「マヘンドラに）そりや、とてもいい！ お前はもうこれ以上考えるな。お

前は、シャクティを信じているんだよ」